

4 麦丸の石造物

4-1 麦丸地区のムラの講の石造物

蕨 由美

1. はじめに

ムラの人々が神仏への供養や祈願のための講を結成し、共同で造立した麦丸地区内の石造物は、江戸時代から近現代まで約 100 基を数える。今回は、そのうちから庚申塔・十九夜塔・子安塔・二十三夜塔・出羽三山供養塔・馬頭観音供養塔・観音供養塔の計 40 基を調査したので報告する。

なお調査は、2016 年 3 月 30 日より 5 月 20 日まで、蕨由美・鈴木千代・畠山隆・菅野貞男・藤村誠枝・宮井雄二・牧野光男・村田一男の会員が参加し、『八千代市の歴史 資料編』の「石造文化財」（注 1 以下「市史」と略記する）を参考に、平成期の石造物も含め、その像容や形態、法量のほか、人名などの詳細な銘文などについても行った。

2. 庚申塔

麦丸地区の庚申塔は、麦丸台庚申塚に 5 基と新田台西の路傍に 2 基、計 7 基ある。両所とも城橋から吉橋への古道沿いで、麦丸台庚申塚は、コンクリートで整形した台状の塚に石塔が固定してある。また新田台西の路傍の石塔群は手を加えられることなく、台石から離れたままのものもあった。なお、「市史」に記載の年不明の破損した麦丸台庚申塚の 1 基は、今回の調査では見つからなかった。

7 基のうち最古は、麦丸台庚申塚の No.1 の「奉造立青面金剛尊像一軀講中／二世安樂／下総国千葉郡麦丸村／元文五庚申年（1740）十一月十七日」銘の笠付角柱塔で、邪鬼の上に乗る剣持型六臂の青面金剛像を浮彫りする。「市史」と『よなもと今昔』（注 2）では「元文三年」の建立になっているが、実見すると「元文五年」で、銘文の通り庚申の年であった。

新田台西路傍の No.2 の安永 2 年（1773）銘の駒型塔は、合掌型六臂像で、下に邪鬼と三猿をやや浅めに浮彫りする。

庚申塔の青面金剛像は、宝輪・矛・弓・矢と左手に剣を右手に人身（ショケラ）持つ六臂像と、二手を合掌する六臂像が一般的であるが、No.1 が右手に丸い袋状（鈴状？）の物を持つことや、No.1 と No.2 の主尊の目がアーモンド形で、横向きの邪鬼が迫力を欠くなどの像容は、18 世紀中葉に印旛・手賀沼周辺で流行した青面金剛像の典型的な特徴（注 3）をもつ。



1 元文五年銘塔の青面金剛像

表1 庚申塔

No.	市史 No.	所在地	造立年月日	西曆	像容	形状	銘文
1	一 52	麦丸台 庚申塚	元文5庚申 11・17	1740	青面金 剛像・邪 鬼	笠付 角柱 型	奉造立青面金剛尊像一軀 講中 二世安樂 下総國千葉郡 麦丸村
2	一 104	新田台 西	安永2癸己 11・吉	1773	青面金 剛像・邪 鬼・三猿	駒型	麦丸村講中
3	一 168	麦丸台 庚申塚	文化10酉 11・吉	1813	三猿	駒型	青面金剛王
4	一 171	麦丸台 庚申塚	文化12亥 2(欠)	1815	(日月)	駒型	一百青面金剛王 當村講中 世八人 桜井氏
5	一 204	麦丸台 庚申塚	文政9戌 11・吉	1826	三猿	駒型	庚申塔
6	一 239	新田台 西	天保12丑 11・吉	1841	(日月)	駒型	庚申塔
7	一 259	麦丸台 庚申塚	嘉永元申 11・吉	1848	(日月)	丸頭 型	庚申塔 當村 講中 十六 世話人 勘四良 彦右工門 長兵工 武兵工 源左工門 新兵工



No.1 元文5年



No.2 安永2年



No.4 文化12年

また、文字塔5基のうち、「一百青面金剛王」銘のNo.4の文化12年塔は、いわゆる「一石百庚申」で、八千代市内では、桑橋の字作ヶ谷津にも「奉参詣百社庚申塔」銘の文化9年（1812）塔がある。（注2）



2 麦丸台の庚申塚

江戸後期からみられる「百庚申」は、数量の多さによってより強い功德が得られるという庶民信仰により建立された。百庚申には、実際に百基の庚申塔を一か所に建立する「多石百庚申」と、一石に「百庚申」の銘を刻んだ「一石百庚申」に大別される。前者は北総に、後者は北関東に多く分布するが、「青面金剛」の尊銘を刻む一石百庚申は珍しく、他には、印西市松崎の文化4年（1807）「青面金剛尊／百庚申」銘、銚子市の慶應元年（1865）「大青面金剛百体庚申」銘の一石百庚申の事例（注4）などがある。他の4基は、江戸後期から幕末の定番の文字塔で、No.3の文化10年塔は「青面金剛王」、No.5～7は「庚申塔」の銘を刻む。

3. 十九夜塔

麦丸地区の女人講に関連する石造物は、十九夜塔が5基、子安塔が5基の計10基あり、東福院境内の隅にまとまって並んでいる。

この中で最古の十九夜塔は、No.8の「元文五庚申天（1740）十一月十九日／奉造立聖如意輪観世音菩薩／一軀講中二世安樂／十九夜講中同行三十五人」銘の二臂如意輪観音像塔で、像容は童女のように優しい。

造立年月日銘を見ると、No.1の庚申塔の同年同月の二日後に造立され、「奉造立・・・一軀講中／二世安樂」の願文が類似し、また「一軀講中／二世安樂」の「講」が異体字で、「軀」と「樂」が旧字である点なども共通し、像容の彫りの作風も丸みを帯びて穏やかである点などから、庚申塔と十九夜塔が同時に同一の石工に発注されたと考えられる。

隣村の吉橋の事例では、寛文8年（1668）と元禄5年（1692）に、男性の講の二十三夜塔と女性の講の日記念仏塔が同時に建立されている。（注5）

麦丸でも時代は下るが、ムラ初めての講の供養塔造立に際して、男性の講とみられる庚申塔と女性の講の十九夜塔を同時に建てていることは注目に値する。

No.12の上部が破損した十九夜塔の造立年は、「辰天」の上の年号が不明であるが、作風や銘文から江戸中期前半とみられ、「辰」年銘から宝暦10年（庚辰1760）の可能性が高い。以上から、麦丸の十九夜塔5基は、元文5年から寛政8年（1796）まで、すべて江戸中期に建てられたと思われる。

表2 十九夜塔 (所在地はすべて東福院境内)

No.	市史 No.	西暦	形状	銘文	写真
8	二-1-24	1740	光背型	<p>元文五庚申天十一月十九日 奉造立聖如意輪觀世音菩薩 (梵字キリク) (如意輪觀音像) 一軀講中二世安樂 十九夜講中同行三十五人</p>	
9	二-1-37	1767	光背型	<p>奉造立十九夜講中三十一人 (日) (未敷蓮華を持つ如意輪觀音像) (月) 明和四丁亥十一月吉日</p>	
10	二-1-43	1780	光背型	<p>奉造十九夜講中 (梵字サ) (如意輪觀音像) 安永九子 二月吉日 新五良</p>	

11	二-1-43	1796	光背型	<p>（梵字サ）（如意輪観音像） 寛政八辰十月吉日</p> <p>奉造立十九夜講中 三十八人</p>	
12	二-1-120	不明	光背型	<p>十九夜講中爲善女人二世安樂也</p> <p>（如意輪観音像） 三十五人</p> <p>辰天 二月吉日</p>	

4. 子安塔

子安講は安産・子育て・子授けを祈願する女性の講で、子安講が建てる子安塔は、「子安大明神」銘の子安石祠と、主尊が乳幼児を抱く像容を刻んだ子安像塔に大別される。後者の子安像塔は江戸中期後半から普及し始め、幕末から近代では十九夜塔に代って北総の女人講石造物のほとんどを占めるようになるが、八千代市では前者の子安石祠が少数ながらも先行し、子安像塔の出現は文化 11 年（1814）の米本林照院の子安塔以降となる。

表3 子安塔 (所在地はすべて東福院境内)

No.	市史 No.	西暦	形状	銘文			写真
13	二-4-14	1810	石祠	當村女人講中	子安大明神	文化七年二月吉日	
14	二-4-33	1856	光背型	安政三辰年三月吉日	(子安像)		
15	二-4-40	1867	光背型	十一月吉日	(子安像)	慶應三丁卯年	
				講人女			
				中講女			

16	二-4-49	1881	光背型	(梵字サ)	明治十四年四月吉日	
				(子安像)		
17	二-4-97	1922	光背型	(梵字サ)	大正十一年十二月吉日	
				(子安像)		

麦丸地区の子安塔は、十九夜塔と並べて幕末期の子安像塔が2基、その右横の木製の祠の中のNo.13の文化7年「子安大明神」銘の石祠と、No.16の明治十四年とNo.17の大正11年の子安像塔の計5基がある。この祠内の3基は「子安さま」として現在も子安講の礼拝対象で、講のある日には香華が供されていた。(本誌別稿「春の女人講行事ー麦丸の子安ビシャー」参照のこと)

子安像塔4基のうち、No.14の安政3年塔は、子の頭部が欠けているが主尊の顔や姿の像容が優れている。No.15～No.17の子安像の像容は、保存状態



3 「子安さま」の祠

も良く、その造立年当時、八千代市から鎌ヶ谷市・船橋市にかけて流行した意匠であり、またその代表作である。

八千代市内の子安講は、如意輪観音に女人成仏と二世安楽を祈願して念仏を唱える十九夜講の信仰形態を強く残す地域と、子安神の石祠や石塔、「子安大明神」の絵などを本尊として拝礼し、「ハナミ」や「ハツセ」など祝い唄を歌う子安神信仰を残す地域がある。吉橋の高本の子安講（注 6）は前者の、高津新田（注 7）や麦丸は後者の傾向が強く、この違いは江戸前期のムラの成り立ちや寺社との関わりに関連すると思われる。

5. 二十三夜塔

二十三夜塔は、麦丸地区では2カ所の庚申塔群（麦丸台庚申塚と新田台西路傍）内にそれぞれ1基ずつ2基ある。いずれも文字塔で、No.18の寛政6年塔は、「大勢至菩薩」の主尊名を刻む。

月待の講の二十三夜講は、まれに女性の講もあるが、吉橋地区ではその人名銘から男性の講（注 5）であり、麦丸の二十三夜塔も女人講の石塔群とは離れた庚申塔群にあることから男性の講であろう。

表 4 二十三夜塔

No.	市史	所在地	造立年月日	西暦	形状	銘文
18	二2-12	麦丸台 庚申塚	寛政 6 寅・ 11・吉	1794	駒型	(種字サク) 奉造立廿三夜得大勢至菩薩 麦丸村中
19	二2-27	新田台 西	文政 7・4・ 吉	1810	駒型	奉待廿三夜

6. 出羽三山塔

東福院の山門の左横に高く土盛りした「ボンテン塚」上に9基、塚の前に1基、計10基の出羽三山塔があり、うち3基は三山のうち「湯殿山」銘を中心にした江戸期の供養塔である。麦丸では、平成12年（2000）までは3月14日に念仏講のおばあさんたちによりテントウネンブツが行われ（注 8）、平成3年（1991）以前はムラのおじいさんたちが集まって天道棚が作られていた。天道棚は、読経や念仏踊りの後に解体して、ボンテン塚に持っていき、三山の石碑を囲んで天道棚を再現した（注 9）という。

No.20の寛政8年塔は、金剛界大日如来坐像を浮き彫りし、テントウネンブツの際の本尊であったと思われる。No.21の文政2年塔とNo.22の嘉永元年塔は、文字碑で大日如来を表す種字「アーンク」を刻む。

表5 出羽三山塔 (所在地はすべて東福院境内ボンテン塚)

No.		造立年月日 銘	西暦	形状	銘文	人名など(縦→横書きに変換)
年順	市史					
20	七-1 -6	寛政八辰 十月吉日	1796	光背型	湯殿山 羽黒山 (大日如来像) 月山	願主 新○○ 五郎右エ門 ○左エ門 ○左エ門 ○○ ○○ 平右エ門 清○衛 ○左エ門 三郎右エ門 紋兵衛 武兵衛 久左エ門 源右エ門 庄左エ門 半左エ門 萱田 藤蔵 麦丸 勘右エ門
21	七-1 -13	文政二卯年 十月吉日	1819	駒型	(アーンク) 湯殿山 供養塔 羽黒山 月山	願主 有右エ門 清左エ門 尔左エ門 利兵衛 勘兵衛 藤左エ門 治兵衛 五郎左エ門 八郎左エ門 治郎右エ門 吉兵衛 三右エ門 孫右エ門 源兵衛 庄左エ門 ○○門 彦左エ門
22	七-1 -18	嘉永元戊申年 十二月吉日	1848	駒型	(アーンク) 湯殿山 供養塔 羽黒山 月山	願主 四良兵エ 五良右エ門 講 幸 八 清右エ門 平右エ門 中 勘兵エ 勘左エ門 治良右エ門 紋兵エ 石右エ門 (他4名は土中埋没)

23	七-1 -29	明治十五年 七月八日	1882	駒型	湯殿山 月山 羽黒山	セ 八 人 石井治左工門 周郷 敏 山寄現輔 周郷清右工門 櫻井平右工門 齋藤太良兵工 山寄甚左工門 山寄勘兵工 石井治良右工門 周郷籐左工門 周郷三良右工門 櫻井五良右工門 周郷勘左工門 齋藤三良左工門 齋藤重左工門 櫻井紋兵工 山寄源左工門 周郷弥助 櫻井四良兵工 山寄久左工門 櫻井石右工門 石井庄左工門 山寄源兵工 櫻井半左工門 櫻井仁兵工 周郷芳太良 櫻井彦左工門
24	七-1 -42	明治廿九年 四月	1896	自然石	(月) 湯殿山神社 月山神社 (日) 羽黒山神社	周郷籐右衛門 山崎幸四知 周郷清右衛門 櫻井平衛文 石井茂八 齋藤三郎左衛門 櫻井彦左衛門 千葉県千葉郡睦村麦丸講社 (県=縣の下に「木」)
25	七-1 -80	昭和十五年 七月 参拝紀念	1940	自然石	(月) 湯殿山 月山 (日) 羽黒山	櫻井春吉 周郷 鎌 齋藤重太郎 山崎辰次郎 周郷雅五郎 齋藤芳太郎 櫻井弥八郎 櫻井弥市 齋藤峯吉 櫻井幸吉

26	七-1 -96	昭和廿八年八月	1953	自然石	(月) 湯殿山 月山 (目) 羽黒山	参拝記念 石井 巖 周郷一郎 小川浦二 石井 茂 周郷太位 山崎現一 周郷元吉 山崎良助 斉藤隆司 周郷米藏 桜井 實 富士倶楽部 川島貞次	
27	七-1 -109	昭和三十五年一月建之	1960	自然石	(月) 湯殿山大神 月山大神 (目) 羽黒山大神	先達 桜井万治郎 四十五才 桜井 正三 四十五才 石井 達雄 三十九才 周郷 傳 三十九才 周郷 民行 三十六才 桜井 正義 三十五才 昭和三十三年二十九日参拝	
28	七-1 -126	昭和四十年九月建之	1965	平石	(月) 湯殿山 月山 (目) 羽黒山	深澤東平 周郷 保 桜井守司 周郷 明 小川 昇 桜井正之助 斉藤太一 斉藤喜一	
							
		No.20 寛永 8年		No. 21 文政 2年		No.29 平成 12年	

29	なし	平成十二年七月吉日建之	2000	平石型	(月) 湯殿山大神 月山大神 (日) 羽黒山大神	<div style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 10px;">参拝記念</div> <p>出羽三山神社代参者</p> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%;">講元</td> <td style="width: 50%;">昭和四十四年度</td> </tr> <tr> <td>深澤東平</td> <td>斉藤美つ</td> </tr> <tr> <td>周郷一郎</td> <td>周郷 茂</td> </tr> <tr> <td>櫻井萬治郎</td> <td>積田キヨ</td> </tr> <tr> <td></td> <td>櫻井政雄</td> </tr> <tr> <td>昭和四十二年度</td> <td>周郷民行</td> </tr> <tr> <td>石井康雄</td> <td>周郷秋蔵</td> </tr> <tr> <td>周郷順正</td> <td>深澤利久</td> </tr> <tr> <td>山崎秀雄</td> <td>斉藤雍三</td> </tr> <tr> <td>周郷孝治</td> <td>櫻井英子</td> </tr> <tr> <td>周郷岩治</td> <td>櫻井隆雄</td> </tr> <tr> <td>周郷節夫</td> <td>周郷 平</td> </tr> <tr> <td>山崎仲吉</td> <td>櫻井行雄</td> </tr> <tr> <td>山崎富蔵</td> <td>櫻井英彦</td> </tr> <tr> <td>岩佐 馨</td> <td>周郷光男</td> </tr> <tr> <td>昭和四十三年度</td> <td>昭和四十五年度</td> </tr> <tr> <td>周郷秀郎</td> <td>周郷長一</td> </tr> <tr> <td>山崎 昇</td> <td>周郷文雄</td> </tr> <tr> <td>斉藤国雄</td> <td>周郷幸雄</td> </tr> <tr> <td>周郷利雄</td> <td>周郷理則</td> </tr> <tr> <td>斉藤和雄</td> <td>斉藤 誠</td> </tr> <tr> <td>斉藤光男</td> <td>山崎康久</td> </tr> <tr> <td>春日善市</td> <td>山崎寿徳</td> </tr> <tr> <td></td> <td>周郷将一</td> </tr> <tr> <td></td> <td>櫻井七郎</td> </tr> <tr> <td></td> <td>斉藤義雄</td> </tr> <tr> <td></td> <td>山崎現一郎</td> </tr> <tr> <td></td> <td>斉藤 弘</td> </tr> <tr> <td></td> <td>櫻井康雄</td> </tr> <tr> <td></td> <td>山崎直二</td> </tr> <tr> <td></td> <td>櫻井 弥</td> </tr> <tr> <td></td> <td>櫻井 祗</td> </tr> <tr> <td></td> <td>山崎 孝</td> </tr> </table>	講元	昭和四十四年度	深澤東平	斉藤美つ	周郷一郎	周郷 茂	櫻井萬治郎	積田キヨ		櫻井政雄	昭和四十二年度	周郷民行	石井康雄	周郷秋蔵	周郷順正	深澤利久	山崎秀雄	斉藤雍三	周郷孝治	櫻井英子	周郷岩治	櫻井隆雄	周郷節夫	周郷 平	山崎仲吉	櫻井行雄	山崎富蔵	櫻井英彦	岩佐 馨	周郷光男	昭和四十三年度	昭和四十五年度	周郷秀郎	周郷長一	山崎 昇	周郷文雄	斉藤国雄	周郷幸雄	周郷利雄	周郷理則	斉藤和雄	斉藤 誠	斉藤光男	山崎康久	春日善市	山崎寿徳		周郷将一		櫻井七郎		斉藤義雄		山崎現一郎		斉藤 弘		櫻井康雄		山崎直二		櫻井 弥		櫻井 祗		山崎 孝
講元	昭和四十四年度																																																																							
深澤東平	斉藤美つ																																																																							
周郷一郎	周郷 茂																																																																							
櫻井萬治郎	積田キヨ																																																																							
	櫻井政雄																																																																							
昭和四十二年度	周郷民行																																																																							
石井康雄	周郷秋蔵																																																																							
周郷順正	深澤利久																																																																							
山崎秀雄	斉藤雍三																																																																							
周郷孝治	櫻井英子																																																																							
周郷岩治	櫻井隆雄																																																																							
周郷節夫	周郷 平																																																																							
山崎仲吉	櫻井行雄																																																																							
山崎富蔵	櫻井英彦																																																																							
岩佐 馨	周郷光男																																																																							
昭和四十三年度	昭和四十五年度																																																																							
周郷秀郎	周郷長一																																																																							
山崎 昇	周郷文雄																																																																							
斉藤国雄	周郷幸雄																																																																							
周郷利雄	周郷理則																																																																							
斉藤和雄	斉藤 誠																																																																							
斉藤光男	山崎康久																																																																							
春日善市	山崎寿徳																																																																							
	周郷将一																																																																							
	櫻井七郎																																																																							
	斉藤義雄																																																																							
	山崎現一郎																																																																							
	斉藤 弘																																																																							
	櫻井康雄																																																																							
	山崎直二																																																																							
	櫻井 弥																																																																							
	櫻井 祗																																																																							
	山崎 孝																																																																							

明治維新期の神仏判然令により、出羽三山の寺坊は、湯殿山の2坊を除いて、仏教を廃して神道に帰した。そのことを反映し、No.23の明治15年塔以降の明治から現代までの出羽三山塔は、「月山」を高く中心に、向って右に「羽黒山」、左に「湯殿山」の銘を刻む。またその下にNo.24のように「神社」や、No.27やNo.29のように「大神」の尊称を加えるものもある。

また、江戸期は、湯殿山本尊の大日如来の供養に際して、登拝した代参者に加えて、

結縁祈願や喜捨したムラの人々の名前が多数刻まれたが、近代に交通網が発達して登拝が盛んになると、登拝者のみの名前を刻むようになり、出羽三山塔は供養塔から参拝記念碑に性格が変わっていった。(注 10)

麦丸の出羽三山塔も、No.25 の昭和 15 年塔以降は、「参拝紀(記)念」であることを明記するようになり、No.29 の平成 12 年塔は、昭和 42 年度から昭和 45 年度の代参者名を記す。なお、東福院本堂内には、この碑を建てたことを記念して、「平成 12 年 6 月 26 日出羽三山参拝記念碑地鎮祭」と「平成 12 年 7 月 13 日出羽三山参拝記念碑建立」の記念写真が掲げられてある。



4 ポンテン塚(右手前は No. 40 観世音供養塔)

7. 馬頭観音塔

宝馬が四魔を承伏すると信仰された馬頭観音は「六観音」のひとつであるが、頭に馬頭をのせていることから、江戸中期から近代にかけて、馬の守護神として路傍に、また死馬の供養として「ソウマントウ」(馬の墓地)などに、ムラ共同で、または個人により馬頭観音を供養する石塔が数多く建てられてきた。

麦丸地区では、字城橋上の眼下に城橋を望む高台に馬頭観音群があり、9基の馬頭観音塔が並ぶ。ここは馬の墓地で、今は行き止まりであるが、かつては古道が通っていたという。

ここの最古は、No.30 の安永 5 年銘の馬頭観音立像を浮彫りにした供養塔で、「麦丸村」と「願主二人」と 19 名の人名の銘がある。あとの 8 基は幕末から昭和期の文字塔で、馬頭の浮彫りを施したものもあり、建立の主体は、ムラ共同と個人が各 4 基ずつである。

No.38 の昭和 21 年塔は「牛馬観世音」銘で、そのころは牛の飼育も盛んであったことがうかがえる。

また、麦丸と大和田新田の境の路傍の辻に、No.31 の道しるべを兼ねた天保 6 年の馬頭観音坐像塔があるが、「大わた新田」の銘があることから、大和田新田が主体で建立したと思われる。道標銘は「東かやたみち/西 たかもとみち」で、大和田新田側からみて左右の行先を示している。(注 11)



5 城橋上の馬頭観音塔群

表 6 馬頭観音塔

No.	市史 No.	所在地	造立年月日	西暦	像容	形状	銘文
30	六-14	城橋上	安永 5 申 3・吉	1776	馬頭観音 立像	光背型	(梵字キヤ) 麦丸村 願主二人 郡藏 新五良 勘右門 庄左門 源兵衛 藤右門 新右門 清右門 幸八 清兵衛 勘兵衛 藤左門 治兵衛 三良左門 五良左門 重左門 新兵衛 久左門
31	六-71	新田台 西	(天) 保 6 未・□・吉	1835	馬頭観音 坐像	駒型	大わた新田 東 かやた みち 西 たかもとミち
32	六-79	城橋上	嘉永 5・10・ 吉	1852		駒型	馬頭観世音 平右エ門
33	六-93	城橋上	慶応 2・11・ 15	1866		駒型	馬頭観世音
34	六-110	城橋上	明治 14・12	1881		角柱型	馬頭観世音供養塔 當村中
35	六-113	城橋上	明治 16 未・ 9	1883	(馬頭)	駒型	馬頭観世音 藤井太良兵エ
36	六-141	城橋上	明治 34 丑・ 2・8	1901	(馬頭)	丸頭型	馬頭観世音 發起人 山崎倉吉 周郷藤左衛門 齋藤治兵衛 山崎熊助 齋藤喜代藏 櫻井徳治郎 周郷千代松 山崎巳之助 櫻井豊治郎 山崎勝太郎 櫻井半藏 世話人 周郷郡司 山崎亀太郎 石井茂八 山崎忠藏 櫻井欣三 石井太惣治 山崎初太郎 外 四十名

37	228	城橋上	大正 15・9	1926	(馬頭)	駒型	馬頭觀世音 当区周郷止
38	六-260	城橋上	昭和 21・4	1946		自然石	牛馬頭觀世音 世話人 小川浦二 周郷太位 齋藤太一 周郷藤作 山崎 寛 齋藤雍三 山崎現一 周郷與三郎 櫻井守司 齋藤久治 櫻井 實 山崎衡輔 周郷元吉 櫻井 好 櫻井金藏 周郷 麗 櫻井承三郎 石井 茂 山崎新之助 周郷一郎 齋藤萬亀 山崎春重 齋藤芳太郎 周郷民行 周郷久兵衛 周郷静夫 山崎良助 櫻井小三郎 齋藤隆司 周郷規矩 周郷米藏
39	六-292	城橋上	年欠		(馬頭)	駒型	馬頭(觀)世音 麦丸 齋藤春雄



No.30 安永 5 年



No.31 天保 6 年



No.36 明治 34 年

8. 観世音供養塔

東福院境内のボンテン塚の右前に、No.40の「観世音供養塔」銘の流麗な文字塔がある。高さ1.6mの角柱型で、台石に大きく「講中」、左面に「明治廿七年十一月」、右面に「遜堂周郷敏敬書（花押）」の銘がある。遜堂と号した周郷敏は、明治18年（1885）の睦村戸長、八千代を代表する書家・俳人で、麦丸の日枝神社境内の浅間神社碑も揮毫している。（注12）

さらに台石の左右と裏面には46名の氏名と金二円から金二十銭の寄付金額が刻まれており、うち裏面の14名は女性の氏名で、最後に「老母中」とある。

現在、念仏講は解散し、また観音講があったという具体的な話も聞かないが、明治中期はおそらく観音講も盛んで、年配の女性も中心的に参加していたと思われる。

表7 観世音供養塔（所在地は東福院境内）

No.	造立年		銘文	人名など(縦→横書きに変換 金額は省略)			
40	明治廿七年十一月	角柱型	観世音供養塔	遜堂周郷敏敬書（花押）			
				セ	周郷芳太郎 櫻井平エ門 櫻井庄右エ門 桜井五郎右エ門 山崎吉左エ門 周郷清右エ門 山崎勘兵エ	石井茂八 山崎現輔 石井藤三郎 半左エ門 櫻井浦之助 山崎幸七 周郷國松 周郷勝右エ門 齊藤重左エ門 櫻井四郎兵エ 萱田村	周郷キン 周郷つマ ○○クラ 石井モン 山崎チヨ 櫻井タキ 周郷キセ 齊藤キケ 齊藤サヨ 山崎ジョウ
				ハ	権左エ門○ 周郷イハ 櫻井彦左エ門 櫻井紋兵エ 山崎久左エ門 山崎甚左エ門	八木谷辰五郎 石井熊吉 山崎嘉藤治 櫻井キヌ 齊藤治兵エ 齊藤長兵エ 櫻井豊次郎	老母中
市史No.	西暦 1894	中講	人				

9. まとめ

麦丸地区では、ムラの講や共同体の石造物の造立は江戸中期以降で、正徳以前の江戸前期に遡るものはなかった。

庚申塔と十九夜塔の建立は、元文5年（1740）の同年同月で、麦丸地区ではそのころにムラの基本的な講が、他村からの影響を受けつつ確立していったと考えられる。

庚申塔や女人講、出羽三山講の石造物の様相も、ほぼ近隣のムラと同じ傾向であるが、No.4の文化12年の一石百庚申塔と、麦丸の子安講の主尊が神道系の「子安大明神」であることを語るNo.13の文化7年の子安石祠は、北総の民俗信仰史を考える上で注目値する。

またいずれも保存状態は比較的良好で、特に城橋上の馬頭観音塔群はその残された景観もよい。

以上、ムラの基本的な講にかかわる石造物について述べたが、富士講に関する石造物は、本誌別稿を参照していただきたい。



6 東福院の女人講塔群の調査風景

注

1. 「石造文化財」『八千代市の歴史 資料編 近代・現代Ⅲ 石造文化財』八千代市史編さん委員会 2006年
2. 木原律子他「睦地区の石造文化財④」『よなもと今昔』13号 阿蘇郷土研究サークル 1997年
3. 蕨由美「吉橋の庚申塔について」『史談八千代』39号 八千代市郷土歴史研究会 2014年
4. 榎本正三「武西の百庚申」『房総の石仏』第12号 房総石造文化財研究会 1999年
5. 蕨由美「吉橋の月待塔と女人講および子供主体の石造物」『史談八千代』第40号 八千代市郷土歴史研究会 2015年
6. 立花幹也・鈴木康彦「吉橋・高本の「人々の絆」の歴史」『史談八千代』39号 八千代市郷土歴史研究会 2014年
7. 蕨由美「民俗Ⅱ-かつての暮らしと習わしの記憶から」『史談八千代』第28号 八千代市郷土歴史研究会 2003年
8. 『八千代市の歴史 通史編 下』八千代市史編さん委員会 2008年
9. 小川奉巳「麦丸の天道念仏」『よなもと今昔』11号 阿蘇郷土研究サークル 1994年
10. 蕨由美「吉橋の出羽三山信仰の石造物」『史談八千代』第40号 八千代市郷土歴史研究会 2015年
11. 「八千代市域道標調査表 No.J03」『ふるさと発見 八千代の道しるべ』八千代市郷土歴史研究会 2001年
12. 村上昭彦 『八千代の文人たち』 嵩書房 2012年